高島　高詩集

北の貌

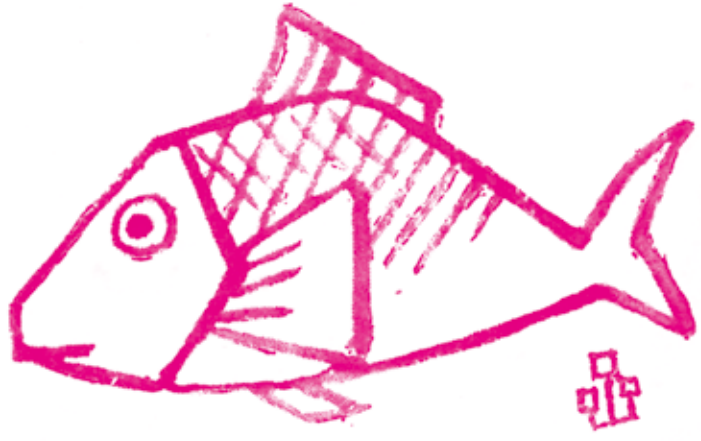
東京　草原書房刊

高島高詩集北の貌

草原書房刊

高島　高詩集

北の貌



東京　草原書房刊

相馬御風先生

御風先生追悼

大いなる人
逝きませぬ
日本の春を泣かしめ
巨いなる星の落ちませしか
永久(とわ)にああその名をばこの世にとどめつつ
親しくなつかしく慈愛にみちて

昭和二十五年五月八日

高島　高(しるす)

最近の著者と美紀子

これらを我を育(は)ぐくみし故郷の山河並びに今は亡き父半茶母静枝及び弟明大の墓前に捧(ささ)ぐ。

又一本を取りて業半ばにして惜しくも逝ける文芸評論家畏兄青柳優氏詩人倉橋彌一氏の墓前に捧ぐ。

序文……相馬御風
序詩……吉田一穂
装幀……内田巖
内田巖

目次

北の貌……一
人間……二
海辺にて……三
立山……五
故郷挽歌……七
歴史……九
人生歌……九
北アルプス……一〇
劔岳……一三
胸……一三
北方の詩……一四
常願寺川……一六
ある日……一八
観世音菩薩……一九
良寛和尚頌……二
まりつき良寛さま……二三
神……二四
雪……二五
寒駅待車……二五
バッハ……二七
小駅待車……二八
自虐……三一
詩頌歌……三二
心象の立山……三三
光……三六
人生……三六
海……三八
こころ……三九
北方……三九
夜半の感情……四一
面影……四二
顔……四二
手……四三
仔犬……四三
光源……四四
ある頁……四七
途上にて……四八
雪ふる昼に……五〇
空天の話……五一
青空……五六
旅の日に……五七
死……五九
仮面……六〇
夏も終りに……六〇
晩秋歌……六三
宇奈月旅情……六四
病院……六七
曠野……六九
宇奈月にて……七〇
山の療養所……七一
横浜旅情……七三
アルプス図譜……七四
心象の窓……七七
雪のふる感情……七九
亡妹哀恨歌……八〇
美紀子……八二
蜃気楼……八三
蛍烏賊……八五
蛍烏賊……八七
ロダンと彫刻……八七
秋日帖……八九
北方譜……九〇
冬……九二
人生理法……九三
利休……九四
春と新任……九六
老子出関……九八
詩作ノート……一〇一

序

私の知っている新人中の新人の一人だと思っている高島高さんが、今度詩集を刊行するについて、人もあろうにえりにえって古ぼけた老隠者の私に序文を書けと云って来た。事の意外に私はちょっとドギモを抜かれたが、しかしそこが、高島さんの高島さんたる所以(ゆえん)だとも思い直して見た。

高島さんの詩はかなり多く読んでいたが、逢ったのは一回だけだった。高島さんが私のところに訪ねて見えた時、色眼鏡をかけていた。私を訪ねた人に色のある眼鏡をかけていた人は、これまでに高島さんだけだったような気がした。

しかしその時私は高島さんと話しながらふと思った。

「この詩人は色眼鏡の奥から透明に自然や人生を見ているんだな。そうでなければこの人の肉眼はあまり透明すぎるか、又はこの人の眼には自然や人生はあまりに光線が強過ぎて眩(まぶ)しさに堪えないのかも知れない。」と……

それから又私はこんなことも思った。

高島高！上から読んでも下から読んでも同じ高島高だ。おそらくこの詩人は真直に立っていても、また逆立ちしても、同じように自然と人生を直視し得る人かも知れない。珍らしい人だ。と……

高島さんはせっかく勢込(いきおいこ)んで訪ねて来てくれたにも拘(かかわ)らず、一(いっ)こう変った話もせずに、極めて平凡な訪問者のようにして帰って行った。

高島さんはお医者さんだ。そのことはかねてから知っていた。しかし何科のお医者さんだか、私はついうっかりし、人にも聞かず、高島さんにも訊(たず)ねなかった。そして私は独(ひとり)ぎめにあのお医者さんは「精神外科」というような専門家かも知れないと思った。しかし或る時また私はあの人は「内科」を「外科」し「外科」を「内科」する魔法医者ではあるまいかとも思った。蓋(けだ)しそんなことを私に思わせたのは、高島さんの詩が私の頭にこびりついていたからだ。高島さんはやがて応召されて外地に行った。そして時々たよりをくれた。その便りにはいつもきまって良寛を思うということが書いてあった。高島さんは戦争に行っても、戦争のことよりも良寛のことを思っていたらしかった。からだは軍隊にまかせても、心は良寛に委(まか)せていたのかも知れない。

高島さんの詩を読むと、私はいつもその感覚の新鮮さに、表現の敏活さにうたれた。しかも高島さんは、その近代的な新鮮な感覚を以て、かの芭蕉の寂(さ)びをしつこいほどに求めている。

いつか私は高島さんに頼まれて茶室の額を書いた。この新世紀的な詩人が茶室を持っているということは、一層私をよろこばした。

寂然(じゃくねん)とただ独(ひとり)茶室に坐って、時にボードレールの「悪の華」の詩篇を口ずさみ、ヴェルレーヌのあのデカタン*な小曲をほれぼれと口ずさんでいても、少しもそれが矛盾を感じさせない、そういったところに詩人としての高島高の無類のいいところがあるようにも私は思った。妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五をヴェートーヴェンのソナタの曲にあわせて読誦しつつも、この詩人の魂には独自の妙境が現像されているにちがいない。

暗い日本海の「北の貌」に直面しつつその渦巻くあらしと波の間に、南の海の凪(な)ぎ渡った静かなさびしい歓びを心ゆくまで味わい得る高島さんらしい。

詩集「北の貌」のプリントの原稿を読ませてもらいながら、私は一種の不可思議な世界に案内されたような驚きと歓びを感じた。

夜と昼と、東洋と西洋と、中世と近代との間の「トワイライト」「宗教」を「芸術」せんとし、「芸術」を「宗教」せんとする一個の巡礼者の幻影。そんなことをも私は考えた。

「北の貌」は南に向いている。そしてそれは頭背を北に向けている。きびしく寒いあらしの中に、ほの暖い春風が綿々としてつきざるメロディーを奏でている。

ふしぎな北の貌だ。

仮面をかむると踊りたくなる

*「デカダンな」の意と思われる。虚無的、退廃的なの意

仮面はかなしい悪魔です
僕はいつまでも仮面をかむっていたい

と「北の貌」の詩人はうたう。しかしその「仮面」はおそらく吉崎の面のように肉附きであるかも知れない。そしてそれは鬼の面でなくて、ただの人間の、詩人としての高島高さんその人の面に外ならないだろう。「原始」の底に「文明」をさぐり、「虚無」の底に「一切」をつかもうとするこの詩人の求道の歩みは、無明の扉をまさに開こうとしている。

詩集「北の貌」はむろん多くの人々を驚かすであろう。私は自分の住んでいる北辺のこの地の近くに「北の貌」の詩人の住んでいることを一つの誇るべき歓びとするに躊躇(ちゅうちょ)しない。矛盾即統一、混乱即調和の境に生きんとする奇怪な新時代の詩人高島高さんが、旧時代生きのこりの私如き老隠者に敢えてその詩集の序文を需(もと)めた謎も、どうやら少しずつ私の心の中で解けてゆくようだ。

昭和二十二年二月十一日

越後糸魚川にて　相馬御風

序詩

空に祝祭(ほがい)の星は燭(とも)れり
落葉に径(みち)も埋れたり
村邑の灯は乏しきかな
地に湧きて泉はひとり歓語(さざめ)くなり

吉田一穂

詩　盃

（高島さんへ）

この盃を友と飲む
　えにしのひだの
　　空のしわ
風景は光にかげる　追憶の日ともならまし
まひる時　そのまひる時
　盃のかち合う気配
　こぼれゆく私語の一片
　金色の音ともならめ

内田　巖

「狐には穴あり、空飛ぶ鳥には巣あり。」

立山頌歌*

本多鐵磨 作曲

雪白く頂(いただき)そびゆ
雲も晴れたる大み空に
立山はこごしく強く
わがふるさとの
心の山ゆ

心澄み冴えわたる日ゆ
雲も晴れたる大み空に
立山はみそぎも清く
わがふるさとの
心の山ゆ

祖先(みおや)思うはろけき胸ゆ
雲も晴れたる大み空に
立山は永久(とわ)に気高く
わがふるさとの
心の山ゆ

（四部混声合唱）

＊頌歌(しょうか)：ほめたたえる歌

北の貌

内田　巖

装幀

北の貌

――親不知附近の未明

1

飢えている海のむこうは暗く壁画のように唖(おし)黙ったまま不安げな眉を寄せ合っている。冷えた灰。灰の屍(しかばね)。白い歯等は組み合いつ噛(か)み合いつ砕けに砕けちるであろう。

2

皮膚病の海は皮膚病の治癒(ちゆ)に近き落屑(らくせつ)期の粗面(そめん)がむずかゆいのであろうか。絶え間なく落屑の上には落屑が積み重ねられてゆく……

3

沈んだ癈園(はいえん)。死面(デスマスク)。手……

4

死面の歯列は階調の宿命ゆえに絶え間なき笑いを粗雑な死面に与えねばならぬのだろうか。粗雑な笑いはときには皮膚病の海を角度のむこうで吠えさせる。靄(もや)のむこうで。怪獣のように。怪獣のように。白く白く銀蛇はのがれにのがれてゆく……

5

遂に銀蛇は眠りこけいる巌等に挑みゆくのであろうか。挑まるれば巌等は獣類のように眼を怒らせる。

6

獣類の眼に明るむ灰色。皺を抱く海。海を抱く皺。うずまけばうずまいたまま漂白されゆく皺等は次第に漂白されゆく皺等の上にひろがりゆく……

7

夜明けよ、夜明けよ、

人　間

火の中では火になりきり
水の中では水になりきる
喜びの中では喜びになりきり
悲しみの中では悲しみになりきる

その究極は無であり
無から再びあらためて力がほとばしり出す
一度死んでから
本当に生き出すんだから
あわててはいけない
早まってはいけない
何も世におそるることなど一つもないのだ
その本質さえ究明すれば
死さえも
瞬間にかがやく永遠
光は無限にかくされている

海　辺　に　て

――あるいは生きる

雪がふればさびしい黄昏だ

能登はみえず
ただ橋場の突堤の灯が
雪の中で泣いているようにかすんで見える黄昏だ
雪がふれば
何か思い出す黄昏だ
人が生れて生きて来たということは
さびしいけれどなんと雄々しいことか
思い出は
いつまでも咲いている人生の花だ
生れたふるさとに生き
ふるさとに死ぬ
雪がふれば波音も荒い黄昏だ
私のどんな境遇においても生き抜かねばならぬのは
この海の知っている私の少年の日の悲願があるからだ
自分の生涯だけは充分自分できめたいものだ

そんな世界に住みたいものだ
雪がふればふるさとが身にしみる黄昏だ
ふるさとに生きてふるさとに死んでゆく名もない男の泣く黄昏だ

反　歌

わがいのち遂に燃え来て泣かんとす今日も雪荒れふるさとくるる

立　山

放散する太陽系らの楽観をわらい
鋭き風雪の刃をたずさえて
その死線を越えて
坐るもの
ロゴス*的よりパトス**的へ

*言葉を通して表された理性的活動
**アリストテレス倫理学で、欲情・怒り・恐怖・喜び・憎しみ・哀しみなどの快楽や苦痛を伴う一時的な感情状態。情念

その無限にひろがる
宇宙真理の中心をふんまえ
生死を越えて
つらなるもの
氷にして火なる
火にして氷なる
その有機体である
無機体よ
むらがる浮遊（ふゆう）する黒雲らの思想をさげすみ
明滅する生命の果に
おおひとりしずかに燃ゆるもの
全くおまえは
生きることを生きている
火と
氷と

匕首（ひしゅ）*を

*つばのない短刀

故郷挽歌*

――僕はこの若き日の詩篇を愛するがゆえに憎む

*悲しみを歌った詩・楽曲のこと

雲は低くて暗く
その上光るのは
あれは立山連峰の雪のせいだ
こんな重ったい空気はめったにあるものではなく
（つるぎたてやま）
こんな鋭い山脈系はめったにあるものではないというのは
この地方の風景画家たちのエスプリ*らしいが
ところで僕はたった今午後三時五十分着の
上野発列車から下り立ったばかりの旅の男だ
列車つかれの眼底には

*精神、知性、才気などの意のほか、霊魂の意もある

はるか山脈の頂上の雪の層がきらきら光り
この停車場の古風なことは
いつまでたってもまがった針の柱時計や
朽ちた四角柱の陰影やこわれた窓の窓ガラス
窓ガラスの外の積荷の影には
幼なじみの×町のTさんやNさんがいるようだけれど
僕はなるべく知らないふりをしたいので
切符を渡すと帽子を真深くかむり
さて雪道を先ず山麓の方に向けてとりたいと思う
町の中は今もやっぱり魚屋さんやお菓子屋さんや銀行や荒物屋さんでにぎわっているだろうけれど僕
　は今では帰郷者でもなく成功者でもなく
一介の行きずりの旅の男だし
又町中自転車や乗合自動車をさけたりするのがうるさいし
それにもまして町湯の噂(うわさ)たちに花さかせてやるのは業腹(ごうはら)だ
僕の生れた町だというのはあの雪の中の灯だけでけっこう

あの灯たちを一つ二つとかぞえながら
今日はせめて夜中まであの山麓の雪道でもあてなくさまよい歩いてみよう

歴　史

日本の北のはずれの
滑川という小さな町に
男生れて
詩もうたえり
泣いてもみたりき

人　生　歌

あられたばしるその道をひるまずつっきり進むもの
あられたばしるその道をひるまずつっきり死ぬるもの

重くかなしく陽はかげりあられたばしるその道は
いつも十字架脊に負ってしかも忍んだ道だった

北アルプス

――あるいは帰国者の祈願

エーテルは稀薄（きはく）にいちめんに
朝空は虹の感覚を帯びて
しずもり
なみよろび馳（か）ける山脈の上に
深い朝の祈りを祈る
その頂上の雪らの純白さに
その陰影のするどさに
夜明けは
今日もおごそかに

いのちの頁をめくるに
ふさわしく
麓（ふもと）の村々の戸をたたく
（原始に山ありしか
人ありしか
森ありしか
天ありしか
地ありしか）
知らず電線にはあまたの雀ら
高らかに
新しいいのちをさえずりうたい
稲田は青さで一色に波打ちつづく
露草をふみ
素足のまま
私はこの故郷の田園をひとり山脈への道を辿る

（親鸞日蓮良寛――私の畏敬する人々の名をおもい私は私の世界にだまりながら）
私はこのうれしい日課のために全てを忘れる
私の苦悩も
私のたたかいも
（私は全く俳優ではなかったが
この大自然にくらべれば
何んと鼻もちならぬ俳優であったろう
私はいまこそいかなる障害にも負けてはならない！）

劔　岳

破邪*の刃物はいじけたりまわりくねったりしてはだめだ
そのため砥ぎすまされた氷の切面が必要だったのだろう

*邪道をうち破ること

天空は水よりあわく
雪雲は重く暗く頂らに襲いたれている
光とは不思議な接触点のことであろうか
すぐ真向いはきらきら強敵立山雄山の水晶体で
この闘争は海抜三千五百米零下百度での話です

胸

そこに夕映えをおもい、たぎる血の紅さ
つらぬけよ焔北風すさぶ闇

手をふるれば久遠の流れのとどろき
みよいまもなお原始の虹、雲とたわむる

北方の詩

山脈を馳けてゆく白馬のむれがある
空は虹のパンセ*を孕んでか
朝あけは雲など呼んで
いま山麓の雪を踏む牛群

*思考、思想の意

草はみえない
この冷却の皮膚下に
草は生きている
このひろびろとした高原は生きている
ほのほするものは――――氷だ
はりつめてこわれそうな

常願寺川

午後の天はしかめっつら
エーテル風の気流もくもり
遠山の頂々は
もうその境界さえおぼつかない
中でもベテラン立山剱は
もうすっかり気嫌(きげん)をこわしてしまい
その暗い雨雲のヴェールをたらして
見えやしない
何をぶつぶつ云っているのであろうかというように
常願寺川途方もなく
空のかなたまでひろがりひろがり
暗く陰気にオルゴールを鳴らしながら
四月の小雨の中

その片隅から雪解の水を走らせている
いったいこれは川なのか
いったいこれは誰がつくったのか
ひと山をこわして撒(ま)きちらしたような小石原ばかりかと思うと
やはりこれは川ですしかもおそろしい川ですというように
曲線風の子川をいつも申しわけのように馳けさせ
充分無気味にしずまりかえる
こういうことは無気味だが
やはりおもしろいことなのだ
この親川全部が
おこり出したらもう手がつけられない
あそこの土堤も松林も畑も家も
あったものじゃない
だが安心するがよい
今日は常願寺川悠々と小雨の歌にひたりながら

気海丹田の*坐禅をたのしみ
おれはおれの人生のためにそれらを興味をもって
少しまなび
がたがたの郊外電車で
ごうごう四分も通り過ぎてゆくだけだ

ある日

死ぬべしとかく紙に字をかき
笑いけり
腹も破れんばかりに笑いたり
かくも弱き男の性の
おかしかり……

*意識をヘソの下数センチの場所に置いて、長く長く静かに息を吐ききる坐禅のこと

観世音菩薩

――心からひれ伏す慈父なる人に

……若復有人臨当被害称観世音菩薩名者彼所執刀杖尋段段壊而得解脱若三千大千国土満中夜叉羅刹慾来悩人聞其称観世音菩薩名者……

施無畏者
聞其名者
救いがたき衆生のためにこそ
永遠になやまれ
永遠の慈悲を垂れ給う
一切を抱擁され
一切の解脱のためにこそ
かしこしや仏位を辞され
菩薩位に下り給うときく
人間であることの

苦行
人間であることの
業
その魂のままならぬ
かぎりなきかなしみにあふるるとき
心生きるのぞみを失うとき
あなたはゆくりなく
あなたは偉大なる慈悲と
生そのもののいぶきを
あたえ給うのだ
つねに仏法の権威の上に立ち
施無畏者
聞其名者
善き魂はつねに善きと知り給う尊さのかぎりなき即現御仏身あなたのみはことの全てを知り給うのだ

良寛和尚頌

――この詩篇をはるか糸魚川にて病み給える相馬御風先生にささぐ

……自従一出家　蹤跡寄雲煙
或与樵漁混　又共児童歓
王侯曷足栄　神仙亦非願
所遇便即休　何必嵩丘山
乗波日新化　優遊可窮年……

鉢の子を愛し
児童を愛し
乞食(こじき)をたのしみ
悠々天地の間を遊ぶ
――鉄鉢*に明日の米あり夕涼(ゆうすずみ)
大愚(たいぐ)
又大智(だいち)良寛
その一生は素直すぎ

*僧が托鉢で食べ物などを受けるのに用いる鉄製の鉢

自然はかえって良寛に似る
一本の竹の子のために乙宮庵の床板を切った良寛
児童のためにわざと幾回も野道でころんでやった良寛
時には孤心をふるい立たせて慨世の思いを作り
即ち恩義久しく亡滅し正義却って凝とせらる
己れを慢り人を欺きて好手と称し錯を将て錯に就く会って知る無し
大丈夫の子須く志気あるべしと喝破して不動菩薩となる良寛和尚
生死をこえて生きに生きた良寛和尚
昭昭現前解脱底
その真諦は円光世尊仏陀なるか
人けなき故郷の庭の庭石に
仕事につかれたからだを休め
はるか秋深みゆく立山連峰の山麓をのぞみ
いま良寛を思うこと切なり
いま良寛をしとうこと切なり

良寛いずこにいねむるや

まりつき良寛さま

――わが鎮魂歌

とんとんとんとん
まりをつくまりをつく
まりはとんとん春陽にはねる
とんとんとんとん
まりをつくまりをつく
まりはとんとん心にはねる
ひふみよいつむつなな
やここのとうじゅういちじゅうにじゅうさん
やあ良寛さまは大にこにこ
やあ良寛さまは大得意

風が吹いても日暮れても
大人も子供も
みなおいで
とんとんとんとんとんそらとんとん
無一物中無尽蔵
月あり花あり楼台あり
そらとんとんとんとんとんそらとんとん

神

色もなき風吹きすさび
満山の木の葉ざわめき
人知らぬこの山の奥
知らぬゆえ人は来たらず
秋おそくして

きざまれし岩に声なし

雪

わらぐつ重たや
手々つめた
太郎は泣き泣きかえって来た
赤い頭巾をまだらにそめて

寒駅待車

（汽車の連絡わるかったぞい）
（汽車出たぞい）
闇には赤いシグナルが二つ三つまたたき
今にも白い息をふきそうな寒さの底で

小(ち)っぽけな停車場のベンチには
四五人づれのばあさんじいさんづれの
残念そうな赤毛布(ゲット)
それでは下り列車が出たのかと
僕も紙くずだらけのベンチの隅に
オーバーの襟(えり)をかきあわせながら
闇々にうかんで見える赤いシグナルを眺めて
何か旅愁が身にしみる
（停車場にくるといつもこれだと）
微苦笑しながら
今ごろ東京であの人たちは何をと
つい眼鏡の位置をかえてみる

＊明治時代、都見物の田舎者お多くが赤い毛布を羽織って歩いたことから田舎者の意。

バッハ

うずまく山脈の雪を掠(かす)め去り
宇宙座にまで舞い上る風がある
炎の天には
神々の怒り高く
青く走り
青くかけまわり
眼爛(まなこらん)々白銀の山を射て過ぎる
阿鼻叫喚(あびきょうかん)宇宙に満ち満ち＊
雪を掴(つか)み雪を投げ

＊非常な辛苦の中で号泣し、救いをもとめるさま

物凄く山脈の胴体を打ちふるわす
瞬間立木見えず鳥見えず人見えず
あるはただ雪の嵐狂いの神の嵐
遂に怒髪(どはつ)宇宙心をつらぬきのたうち
のたうてば倒れる既に死の雪崩に——

小駅待車

半曇りの空は引心器*を失ったように
何か風景を浮き浮きとさせ
たとえば重量を失った農家や
畔(あぜ)のはんの木たち
遠い山脈に

*ホースやコードを巻く器械

綿毛のような雲が二つ三つ浮き
まるきり掌(て)でつかめそうな風景が
水橋口駅の構内に
上り三時三十二分発の
富山電鉄電車を待っている
僕の魂の中心にうつり
風もわずかに草をなでるぐらいに吹き
成(な)る程これでは
大変
第六交響楽に似すぎて
歓喜と苦脳を
抱いたベートーヴェンも
あっちこっちと
歩くよう
（神の啓示というものを

再びわれわれは考えるとき
このような風景の中を
一人で歩むべきである）
小川は
時々光った短刀をかざして流れ
水車はにぶくまわっている
（僕が住んでいる
滑川町の側面をながめるにも
都合がいいし）
誰れもいないこの小っぽけな停車場の
この二十分の待車は大変すっきりして
ルナン*を読むにも丁度よい

*エルネスト・ルナン。フランスの人文主義者、『イエス伝』の著者

自虐（じぎゃく）

――太宰治氏に手向く

虚空に花とひらくもの
虚空に夢をえがくもの
その太極（たいきょく）に何が待つ
雪の嵐か花の香か
心勇んで歩めども
誰れもかえらぬ日が暮れる

詩頌歌

おお詩！　復讐（ふくしゅう）と悲嘆（ひたん）の神
おお詩！　宇宙をかけめぐるエーテル波
おお詩！　友情と力
おお詩！　あらゆる敵

おお詩！　苦悶（くもん）と死
おお詩！　全能者
おお詩！　魂の動力
おお詩！　潜（ひそ）むもの
おお詩！　排するもの
おお詩！　人民と国家の代表
おお詩！　無人島の王
おお詩！　破壊と創造との一致
おお詩！　悲傷と慟哭（どうこく）の天
おお詩！　無限の一瞬間
おお詩！　孤独と慰藉（いしゃ）
おお詩！　感動の最極点
おお詩！　永遠の反逆者
おお詩！　絶望と涙
おお詩！　流血と勝利

心象の立山

心のうちのいとしさから
熱い涙のこころの火から
天が八方にたれこめて
雪の青みの空あたり
――それは論理で解決されたもの
――それは情愛で澄みきったもの
はるばる求める人間の
最高だと信じたあの涙
――お前はかくれたるものを信ずるがよい
――お前はかくれたるものを見出すがよい
親であり子である澄み切った
こころの中で灯をともす
――空が青いのはそれは雪が澄み切っているからだ

——山が鋭いのはそれはこころが澄み切っているからだ
はるばるつくすそのこころを
鋭い線で立山が
すっかりえがいてくれている
あの立派そうな姿をした雲も君子かも知れないがあんなものは君子ではない
——本当の哲学をお前に見せよう
——人生を不動に不変にするもの
——茶の湯の心のあの不退転
苦難を逃げてはいけない
堂々と向い撃つそのあたり
あの立山の雄山の頂上がそびえている
——あのいただきあたり空が圧倒されてにげまどう雲らは充分卑劣すぎる君子である
——堂々とうち建てること
——真理をすっかり把むこと

人生はそんなに浅いところにはない
これが人生なんだと思わぬところに
本当の人生が顔を出す
——雄山のあたりでちぎれた雲を本当の雲だと思うかも知れないがあれは卑俗すぎて雲ではないあんなものは雲ではない
天の本領の目ざすところ
充分暗い人生の空あたり
立山はぐーんとそびえてそそり立つ
本当のことはそのように
あかるすぎる程あかるすぎるので
時には暗すぎるのだと思うのだ
本当はあかるすぎるのだあかるすぎるのだ
はっきりしたる道なのだ

光

光(ひかり)いのちに
みつるとき
ことごとく
天地
あたらし

人　生

ひとりひとりが
ほんとうのことを行い
たがいに他を傷(きずつ)け合(あわ)ないで
高きをねがい
尊敬と愛をもったら

この町が
いや世界の全部があかるくなるのだと
雨合羽にからだをつつみ
霙(みぞれ)の滑川の停車場道を
二人で帰って来たたそがれ時
あの人が云った
風が烈しく
霙がやけに
顔にまで吹きつけていたので
美少年だったあの人の頬も熱く
目はまるで泣いているように見えた
あれからもう二十年
あの人はもう墓場の石の下に眠り
今日もこの町はたそがれてはげしく霙がふっている

海

焔する面輪を音もなく通りすぎてゆく風がある
灰色のパンセ*は其処に原始の火と化す空であるか
遥かなる想いを捨てて
魂の凝視を凝視するならば海は暗みゆくのだ
火のついた衣裳のままで　火のついた衣裳のままで
生と生とをめぐりめぐる
日の軋みの輪影を、滅びゆくその最後のものを
その界境の方向について
いま鬱々として歴史の手は

*思考、思想の意

しずかにしずかにかざしみられるのである

こ　こ　ろ

雪のうす青きその透明
その陰影のふるいつつ
青天さむきそのしじま
ひびきも絶えて消えさりぬ

北　方

切り削がれた山膚ら
重量ある雪は青い水に等しい
死は生より更に生であるか。氷の剃刀。剃刀の氷よ

ひねもす吹雪はうたうのだ焔の歌を
だまりつつ人みなが泣く
ささくれ立つさざらの風。風のさざら
そこより生きる笑いがある

同じく

日毎に雪崩くる情感のかなしみ
あくまで雪は原始の孤独を夢みて暗い
さかんなる生命のほどばしりよ！
身は落ちてゆく

夜半の感情

壁の中にじーんとおれの掌(て)がしずんでいる……
冴え澄まされた水晶のように透明となったおれの心である
くもったかがみの中におれの貌(かお)がしずんでいる
それは冬空に傾きかけた帆のように萎縮(いしゅく)し褪色(たいしょく)している
やつは深海につめたく光っている魚の眼であるか
肉体の中で一つの赤い花びらがしおれてゆく
枯木のように闇に慟哭(どうこく)するものはおれの幻姿(げんし)とでもいうのか
寒ざむと冷え切った掌の中におれの明日が眠っている

面影

燻(くすぼ)り、くすぼり土耳(トルコ)古煙草のけむり
薄陽に想いを沈め、窓に倚(よ)り
想いしきり、こめかみをはらばう雲を追いけり
けむれば古き歯牙(しが)のいたむ
手を当(あ)つれば、銅の錆あわれ
あわれ、ひねもすは煤(すす)みし壁に黙(もだ)してありぬ
瞑(つむ)れば暗き海、冬波に鷗(かもめ)飛ぶとや

顔

なおも笑っている顔
かなしもうとはしない顔
仮面に似ていて憎めないこいつ

手

いつも動いていろかあいいぴえろよ
おまえがいたずらをやめていると
ひからびて見えてなぜかさびしい

仔犬

この白い小さな生きものは
まだ足が充分ではない

光　源

ヨルダンの流れの水浴びて
エリア*なるヨハネに
洗礼を受けしイエスは
人間の卑少に対する
なみなみならぬ自覚があった
再生に向う意志
救い
何がこの世の最大の糧であったか
一つにしてしかもただ一つなるもの
父います自覚
子なる自覚
二元にして尚(なお)一元に超越されるもの
一如(いちにょ)

*ユダヤ教において、モーゼに匹敵する預言者とみなされており、またその不死が信仰されていた

宇宙を透視する魂
火にして氷なる
もはや動かざる魂の宿
巌(いわ)となれる方向
うるしに皮を焼れようとも
茨(いばら)に肉を破られようとも
その生涯をかけることにより高きに昇り高きに進み
それよりましての
勝利とは最後の勝利であることを
さげすまされ
迫害されることにより
十字架に血潮を流すことにより
あなたまかせであることにより
光栄の日の
まさにおごそかなる確心の中心に立つ

――復活

ああおそるべき言葉であると同時に最大の力
いのちを尊ぶもののみに酬(むく)いられる
彼の創造されたる意義と宇宙への解明を
人間界とは宇宙の小部分にすぎぬことを
失うことによって得ることを
取税人や漁師や売春婦なれば更に近づける
ああわれらの創造主とは何か
何が故にホザナ*と叫びあがむべきか
メシア*とは
それらの一切がわかり
内よりひびけるものの
宇宙の主なるもののささやきにふるい立つ
イエス
人の子にして神の子

*ホサナ。イエスがエルサレムに入ったとき、民衆が祝ってあげた叫び
*救世主のこと

ナザレ*の大工の復活
光は永遠に放たれ
解放はまさに瞬間にある
高く且つ永遠に不動にして不死身なる

ある頁

雲は涯(はて)しないもの
重量を失い
天いっぱいをおうている
はるか曠野(こうや)の涯にある
烏のようにぽつんと見える小っぽけな村
村に灯がついて夕暮が来た
雲の裏にある雲には
虹の照明がかくされているんだろう
曠野につづく一本の小道を僕は歩いている

*イエスの出身地

一本の小道は村にもつづき空にもつづいているのだ
瞬間風が追いかけて来て僕の脚を折る。僕がよろめく
だが僕は歩いてゆく。僕はあとをふりむかない
やがてあたりは生涯のように暗澹(あんたん)とくれてしまうだろう

途上にて

「悪い天気でね
近い山は白うごわすで
じき雪がくるんだあ」
あの人は
もう五十をとっくに越しながら首によごれた手拭(てぬぐい)を巻いているが
巻脚絆(まききゃはん)*もしっかり巻いていて
濃い眉毛に目は二重瞼(まぶた)で大きくくるくるして
厚い掌(て)と毛むくじゃな太い腕をもった人で

*小幅の長い布で、足首からひざ下まで脚を巻き上げるもの

こんな霙(みぞれ)の午後の道を
すっかり霙にぬれながら
五六貫もある薪(まき)の束を背に負って
山加積(やまかづみ)あたりから
滑川(なめりかわ)にやって来たのだが
その声の粗いのは
幾分息せき切って歩いているせいもあって
その心は
充分あたたかく
一二度しか会わない医者の僕に
そんな素朴な言葉をかけて
微笑むのは
やっぱりどこかさびしい人なんで
仏なんかを信じている
そっくりそのままの善なのだが

「かえりに寄ってゆきなさい」
そんな言葉をかけながら
僕もすっかりあたたかくなって
霙に微笑した顔をたたかれながら
自転車のペタルを踏んでいる
はればれしくペタルを踏んでいる

雪ふる昼に

なごやかなるものは
愛すべきである
しずかなるものは
尊むべきである
いつか人々の心が
そこにかえる日

かの人間のふるさとの美しさ

空天の話

雪の青みの光るとき
時も真昼をすぎるころ
はるかな海の海なりや
松葉のしずくの音をききながら
ごぼりごぼりと雪をふみ
昼なお暗いこの松林を
あてなく歩く修羅(しゅら)ひとり
（かなしみがおまえの生涯を
きれいな夢でひたすという）
（人生は別れの言葉でみちている）
いいやそうじゃない

まだふりそうな雪空のように
かつていつかの日天女のように消えたいもうとの
あつ子がまだどこかでねむっているように
うつくしい胸の底で鳴った
あのいたましい呼吸の音のひびきのように
（思い出だけで生きようということは
やはり生涯を夢だと信じている
あの胸の悲しい生理のせいなのだ）
ほんとうはエーテルのような
無色の空の中で
あつ子は両頬（ほほ）の笑くぼのさめたる顔で
きっと口をむすんで前方をみつめている
（それは終ることの出来なかった自分のあとの生涯をじっと
みつめるかのように）
おかあさんやあき子やみんながわたしにはまだよく見える

本当はわたしは死ななかったのだというように
そんなかなしみをこめたまま
ほんとうはそのままどこかへ行ってしまったのだが
それではあんまり清すぎるために
十七年間生きていたこともたしかなんだというように
松林のしずくの音や
はるかな海の海なりは
これはけっして夢ではない
青くかなしみに燃えた心の底を
浜風がはてなく吹いてゆき
あつ子がかつてみんなと別れてしずかに歩いて行ったという
西方浄土という空のかなたには
今日はやっぱりむなしい雲ばかり
あき子やけい子やとし子やみんなが生きているように
あつ子は本当にいないのか

（にいさんがうそをいう）
あき子はきっと笑うだろう
（かなしみというものは
すぐに笑いにつづいている
かなしみというものははてしもないのに
もうすぐ笑いがおっかける）
それが詩人の生理なんだと
おれはだれにも語らない
海の海なり松のしずく
ごぼりごぼりと踏む
雪みちに
（あつ子はかなしく生きている）
あつ子は生みのおかあさんの瞼（まぶた）の中に
いつもきっとほほえんでいる
人生が深い哲学の井戸であるために

死人が生きているようになることが
そんなにほとんど不可能なことではない
ほとんどそんなに不可能なことではない
雪がこんなに青ざめて
松林の中にふりそそぐ
ぴかぴか松葉をひからせてひどくふる
かなしみの底には
じっといいしれぬリズムのように
幸福が
たくさんたくさんあるかも知れない
それだからこそ
こごえながらも生きている
おれもやっぱり生きている
ほとんど泣かないで生きている

青　空

「知っているかね
人間というものはつかれやすいということを
だから会うたはじめにはさようならを
幸福な時には不幸を
生きている時には死ぬことを」
そうしたら友だちが云ったのです
「君には眼鏡が似合うよ」と
どこを見ても緑ばっかりの
晴れた初夏の真昼の森の小径(こみち)で
その時僕は樹々の間からはげしく草を射る太陽に運命よりも一層運命的なものを感じはじめていた
たとえば感慨のない訣別(けつべつ)や
彼がいるかわりにというように石がいるという時間の切ない変化へのかなしみや
弁証法という一つかみの生活への薬味や

飢餓(きが)への期待へのかすかな不安
「それぞれ」
と又友だちがいったのです
「うそから出たまことなんだ」と
僕はだまったままむしろ小径の石ころや樹々の根っこに生えている絹糸のような蘚苔(せんたい)類への興味の方
へと傾いて行った
そして云わなかったのです
「つまりみんな生きていることを忘れることがだんだんうまくなったということだね」ということを

旅の日に

西瓜の種ひとりかみしめ
友を待つ古き支那(しな)酒店の二階
窓からは紺絵具のごとき南国の青空
椰子(やし)の葉にさえぎられ見え

客のないその店の奥より洩(も)れる
誰がすさびならむ
胡弓(こきゅう)の音むせびてひびき
旅人われにせまり来る
幾万里来つるかな
この古くちし支那(しな)酒店の椅子にひとり坐れる
この身は遠くへだつかな
「シャム」
その国の名われひとり心の中でつぶやき
人の身の不思議なさだめおもう
不思議ないのちおもう
友は来ず
胡弓の音ますますむせび
旅愁果しもなく真昼の南国の青空につのれり

反歌

かずかずの思い出秘めしそのかみの南の国のなつかしきかな

死

ある日の午後ベートーヴェンが
ノートの端に書いた
「喜劇が終った
人々よ喝采(かっさい)せよ」と
部屋の窓からは飴(あめ)色の空が垂れ下り
腕の力がにぶく動きがいたいたしかった
やがてベートーヴェンは
机上の林檎(りんご)の腐りはじめるような幻想の中に
静かに瞳をとじた

仮　面

仮面をかむると踊りたくなる
仮面はかなしい悪魔です
僕はいつまでも仮面をかむっていたい

夏も終りに

――わがささげる追慕

ある時
立原道造が池の一羽の白鳥をみつめていた
風が死んで
蜩(せみ)が汗ばんで来てかなしかった
ある時
中原中也が
港を出帆する船を見送っていた
風が死んで
波止場のコンクリートを焼きつけ
流れ出る汗がかなしかった
夏も終りに
夏も終りに
あの死んで行ったなつかしい詩人たちの
心の歌のように
空も山も森も人も
かなしい旗をなびかせる
何故人が生きるか
何故人がかくくるしむか
夏も終りに
夏も終りに

死んで行ったなつかしい詩人たちの涙のように
はつ秋の風がすでに巷に吹きわたって行ったと語っている

晩秋歌

雲はすっかり
紅をぬり
はるかな地平の果で
くつろぎながら
だまっている
野や森や農家や小川など
滑川(なめりかわ)から中加積(なかかづみ)までの
この一すじの半道の国道を
ぐるりととりまき
秋の日のたそがれ色に

暗いパステル画をえがいている
突然ミレーが悲壮に
カンバスをもって野に立ちあらわれ
アベマリアの曲が
地平の果から奏せられるように
離別や憎悪や悲哀など
人間の胸憶(きょうおく)をゆすぶる一切の感情は
ここではすっかりぬぐいさられてしまい
無と創造が
知らぬ間にとってかわる
死にまさる生の価値を
ペタルを踏む
わが肉体の生命に感じながら
霜枯れは今豪華な宗教を
現出する

われのもたざるものは一切なり

宇奈月旅情

世路のけわしさ
そのにがさ
すっかり忘れてしまったよう
この宇奈月の山脈は
山の霊気にひたろうと
五六年ぶりでやって来た
おれをぐるりととりかこみ
おれの心をつかまえて
黒部の川も入梅の
山の出水を暗く鳴らしながら
たしかに真如の法界の

オーケストラをば奏でている
おれは傷つきつかれ果て
反抗の爪をばとぎつづけて来た
所謂追いつめられた人間だが
（スピノーザ*的に云って
悔恨は罪悪だそうである）
やっぱり仏や光にあこがれる
その心情のかなしさを
充分感じて生きている
「幾山河越えさりゆけば」
「まあ常識的よ」
「ところがこれはやっぱり一元の
たしかにこんなすばらしい自然を自然以上にうつした大きな詩人の世界じゃないか」
「それは安易な陶酔よ」
「いやたしかに牧水は

*オランダの哲学者

酒の味もわかったが
いのちのかなしさもわかった男だ」
「しかし陶酔以上のものをってねゲーテがホホ」
百舌(もず)がしきりに空で鳴く
どこで鳴いているのかわからない
しかしそのウォズワーズ*風の鳴き声は
この雲だと思えないような
この山岳性の黒い積乱雲の中かも知れない
世路のけわしさ
そのにがさ
充分超越の目をば養えよ
破壊と創造を一つと見る目
そんな目をば充分養い見なおせよ
このパノラマの山脈が
黒い積乱雲の空の彼方で消えるはるかも

*ワーズワース。イギリス・ロマンティシズムを代表する詩人

ただに光りはせぬだろう
岩かむ黒部の川のこのオーケストラも
そうだあんなにただは鳴りはせぬ
あんなにただはひびきはせぬ

病　院

ああこれだって運河の一種だな
両岸がコンクリートで
真白の石橋がかかり
柳は
七月の陽に緑に映えているし
その上
あの鉄屑(てつくず)船をゴンドラだと思えば
まるでベニスだな

（何こんなベニスがあるものか）
（上海の場末だよ）
それにしても
運河の面には
小波は網の目のようにそよぎ
やはり
街が横浜だけに
エキゾチックと
抒情性をもっているよ
それに町名だって
橋の名がつくのが多いのだし
やはり運河があるということは
横浜のムードに何か貢献しているんだよ
それでは滝頭車庫前だから
失敬する

この車庫前の沢山の線路をわたって
真直ぐつっきれば
僕のつとめている
横浜市電気局友愛病院なんだよ
田寺幹夫ってね
島園さんのところにいたチーテル*が
ハープト*なんだ
何大変いい人だよ

曠　野

どんな嵐のあとにもほのぼのと陽のさす朝があると思え
地平の彼方にはいつでもかくされた光がしまってあると信ずるのだ

*医学博士のこと
*主任のこと

宇奈月にて

四方を緑の山脈でかこまれていることは
これはある種の宗教に適している
いいえある種の哲学です
いいやこれは全く文学だ
はるか湯の宿の赤い屋根
コーヒ店でなるレコード
西洋建の幼稚園の門
いいやそれより小高い公園の
明るい太陽ととけ合っている藤棚下の白樺ベンチ
緑と深紅の草花にかこまれて
リップスやトルストイやゲーテと
向い合って
ゆっくり人生や人間どもを考えることも

これはやっぱり宗教です
いいえ哲学の部類です
いいややっぱり文学だ

山の療養所

空は大変曇っているけれど
山の頂々の雪の白さは
すっかり空をみがきあげ
白光り飛ぶ雲もあるわけで
山岳電車も幾回もあともどりはするが
そんなに遅すぎるということはない
こんな山又山の中では
電車を架ける工事も大変だったろう
この山の奥に幾百年来のお湯があったということを

はじめて知った人は何とかいう漢学者で
多分子曰くとか孔孟(こうもう)の道を知ろうとか何んとかで
一人奥山探見にでも出掛けたそのおかげで
こんこんと出る青い出湯を見つけちゃってすっかり大金持になったんだろう
電車がゆれると
電車と逆行して流れる
黒部川に電車がいかにも落ちこみそうなかっこうになるので
僕のとなりの女のひとも
ちょっと不安定な眉をくもらせる
こんな暗い空の下でも光る瞳は
多分ラッセルなんかも少しあって山の療養所に
たとえば新任医師の僕の診察を乞(こ)いに行くのかも知れない
何しろ外はびゆびゆ木枯で寒いので窓ガラスもしめきって少しむっとするのだが
このぎっちりつまった人々は病人かさもなくば
この土地の爺さん婆さんおっさんという顔だろう

それで病後にちょっぴりそり残した
僕の口髭(くちひげ)の顔も少し注目する気になるのだろう
向うへ着くのは四時半で
今は四時きっかりだから
もう三十分かたかたゆられて電車でこの山々を越えさえすればよいわけだ
登る電車の窓ガラスには
どこまで行っても青い青い黒部川

横浜旅情

曇った灰色の雲のなだれと
立ちならぶデパートの白い白亜の窓口は
すっかり僕をかなしませ
大変立派な襟巻(ボア)をした
夫人の白い指先もつめたそう

街を行く誰もかも
みんな旅人に見えたのは
街が
歳暮売出しのせいだったろうか
紙っくずをとばして
寒いからっ風も吹いていたっけ

アルプス図譜

——荘厳なるものは愛に拠る

君臨する万軍のエホバ
群青(ぐんじょう)は白く虫ばまれた孔雀(くじゃく)羽根の感傷ででもあろうか
まさにオパールの孕(はら)む図南(となん)*の夢に
しいたげられたあこがれは

*大志をいだき大事業をしようと試みること

生涯の傷痕(きずあと)を喰い破らん喰い破らん
盲(めし)いたるものは開眼せよ
火の
氷の
つるぎの
しのび泣き
生きとして生きるもの
崖(がけ)の
奈落の灯にあつまる涙をかきあつめ
いま新雪の山容に

いどまんとするか
愛はかなしき殺人なるや
身を起すために
身を捨てよ
匕首(ひしゅ)*をかざせ
おのれが骨髄(こつずい)を刺し通せ
一つの生は存在し得る
悪はほろびん
悪はほろびん
君臨(くんりん)する万軍のエホバ

*つばのない短刀

現出する雪はたちまち心眼の方向を馳(か)けめぐり
きびしき闘争の歌をばうたい出さん
まさに闘争の歌をばうたい出さん
我が生れし日滅び失せよと

心象の窓

すっかり松林も雪でぬれているし
雪も氷の一片をきらめかせながら
白陶器のようにかたまりながら
海に向って流れている小川に沿ってつづいている
（こんな松林はどこにでもあるものだ）
海は今も淡緑色で

はるか水平線だって
雪やら雲で見えやしない
こんな冷めたい冬海見ていると
松林の中を
ごぼりごぼり雪を踏みながら
雪そのまんまの雲の下を
心象や心のかなしい風景と共に
まぎれこんでいるお前がわからない
（それでも恋のかなしみや
人への心づくしがそんなにも泣きたくなって
お前は雪や海の音にさそわれて
歩いていたいんだといいたいんだろう）
お前の死んだおかあさんの魂がここにあるとは思われないし
それよりもあんなに心をつくしたあの人が子供を抱いてお前に冷い言葉の一つや二つ云ったってここ
　ではさらさら波に氷が砕かれているばかりだ

そんな松林の松葉の遠く
冬海や氷雲や心象のすべてが
お前の心の中に生きている
よみがえったものは真実で
その他はやっぱり嘘が多い
雪や氷につまずいて歩いていると
掌（て）の中があたたかくほてってくるし顔も熱くすっかり何んでも愛したくなって来て
憎しみまでが雪のようにさらさら涙と共に淡緑色の海のむこうへ消えて行く
……氷やこれらのおんなじ暖い風景たち……

雪のふる感情

それに津波のようなものをかんじ
花びらのようなものをかんじ
踊り子のようなものをかんじ

私は古代獣のようにうずくまる
冷めたくはらばう追憶の世界に忘れていた童心がひらひら白い帽子をかむってやってくる
私はとてもさみしくなって窓ガラスのようなものをかんじ
私はそれをそっと払いぬけようとする
私は瞼の熱感のためにいつまでもじっとふるいを帯びた感情を凝視(ぎょうし)している

亡妹哀恨歌

外は雨だか霙(みぞれ)だか
じめじめなんだか暗い音がする
そんな天の又天の
どこかに晴れわたった一点があり
今宵おまえの蒼(あお)白い額のあたり
鋭い聡明な叡智(えいち)も輝いて
瞳もきらきら光っている

それにもまして片えくぼ
十七年間のおまえの生涯の
全てを清く可憐(かれん)にかざるもの
今宵はなんだか少し皮肉笑いさえ見え
いいえこれは皮肉じゃない
すっかりこの世のことをあきらめた
乙女の静かなあきらめの顔だろう
（かあさん
唇痛い）
本当におまえの紅い小さな唇に
血までかすかににじみ出て
おまえの苦痛が
どのように
おまえが歯をくいしばって耐えていたか
それがありありと立派に保証する

（だんだん死ぬんだ）
おまえの中肉の十三貫あった目方が
今ではもう九貫位になったという
足の細さや
腰の細さ
晴着着る日もあきらめて
雨や霙（みぞれ）と一緒に
今宵どこかへ行こうという
おかあさん晴着をきせておやり
頬紅も充分可憐にぬっておやり
（こんど生れてくるときこないな苦労せぬように生れてくるわかあさん）

美紀子

この言葉は
この楽書（らくがき）は
この表情は
この仕草は
神のものであろう
四才の美紀子は
蝶々のとぶさまと
薔薇（ばら）の花がちきという*
彼女の目（ま）な指しからは未来が生き
虹が七色の光を放つ
薔薇はその棘をばかくし
太陽はところかまわず希望と勇気をふりまくのである

蜃気楼（しんきろう）

それが幻であろうとあるまいと

*好きの意と思われる

あなたは真実それを見ることによって
信じなくてはならぬ
水平線がついに一つの単なる虚無ではなく
一つの実存と変りゆくことを
瞬間と云えども
一つの実在と変りゆくことを
桜の花びらが眠けを誘うそよ風に
散りしきる晴れた日の昼(ひ)でりでも
又は空が春のものなやましい愁(うれ)いのために
暗い雨雲などたれこめている昼でりでも
それは現れてはすぐにも
消えるはかなさの映像であったとしても
これこそ滑川(なめりかわ)海岸のもつ夢と感受性の中に
われわれは一つのロマンチーケル*と詩の美しさを思わねばならぬ
人の世の切なさや絶望におそわれた時

*ロマン主義者のこと

われわれはこの季節の夢みる現象に
あたたかく慰めらるべきであろう
それは一つのボカ・ボンド*への限りなきあこがれであり
まぎれなく海がうたう幼年の日の牧歌である

*漂泊者のこと

※蜃気楼はゴビの沙漠はよく知られているが、この北陸の滑川の海にも四五月の季節に夢のように現れ消える。

蛍烏賊(ほたるいか)

太古の春の夜の海に人間はなく
いちめんにぬれた蛍光のみ
光りかがやきあったとすべきであろうか
そこには神々の思い出があり
星々の歌があり
人間本来の郷愁があつまる

そんな日も
この小烏賊はこんなにも群生しいたわり合い
自由に平和に夜の闇を照らし合いながら
未来への大いなる夢の光茫を
むさぼり喰っていたとすべきであろうか
僕は今遊覧船の上から
人々のあたりかまわぬ嘆声（たんせい）よりも早く
これらの太古へのしきたりと
きらめく蛍光（けいこう）の孤独さとさびしさとわが少年の日の見果ぬ夢に打たれてしまい
ふるさとの春の夜の海のもつ
今更ながらの重々しいなつかしさにむせんだのである

※蛍烏賊は世界の三海岸にのみ存するといわれ、その一つはわが滑川海岸である。

蛍　烏　賊

太古への郷愁をたとえてみれば
闇の海の底へとしずんでゆく
蛍烏賊でしょうか。
滑川（なめりかわ）という越中の小さな町の

――新日本風土記「北陸路」より

ロダンと彫刻

ロダンについてはすぐれた人々が
たくさんのことをいいすぎていますが
ところで僕はロダンの彫刻がその

眼窩(がんか)の陰影にあると思うのです
たとえばかの「考える人」について
ロダンは自分の心の陰影をもって
モデルたちをはっきりみつめるからです
それはたしかにモデル自身がモデルではなく
ロダン自身がモデルになっているのです
これらがすぐれた精神の二相系の一部で
時空的制限をのりこえた
理性のひびきの一種でしょう
彼はきっとこう呟(つぶや)いたと思うのです
（ノミよりおれの心の方が鋭すぎるのだと）
いいえ心の方がありすぎるのです

秋　日　帖

1　葉っぱと葉っぱが重なり合って
2　一番高い梢(こずえ)ははや黄ばんでいる
3　風が吹くとそいつがくるくるまわって
4　おちてくる
5　汲み上げ井戸のふちで人は黙然(もくぜん)としている
6　黄ばんだ落葉にも気がつかない
7　彼の後姿を西陽があかく照しているが
8　深い井戸にうつっている青空にも気がつかないらしい
9　人の影が長くのびている

10　立木のある納屋の垣根の濃い影のしげみは湖のような青空をあびている
11　そこに数匹の虫けらどもがうずくまってあたりをうかがっている
12　これからどうする
13　と虫けらどもが云い合っているのかも知れない
14　やがていつのまにか人影が去り
15　井戸の石に西陽はますますあかく、のぞくとその底に古い顔がうつっていた

北　方　譜

地を匍(は)えよかのモンゴーレンフレッケよ、日暮よ
その膚(はだえ)はとぎすまされ
白蠟(はくろう)の
つるぎの馳(か)けはせる
山脈の頂々をかすめ
かの空さえ
まるで虚空のように
鉛色の雪をいっぱいつめている
どこかで地の果で
透徹したいのちの讃歌がきこえるように
雪崩は今日もいくつもいくつも
バッハのフーガのように不死身に

ぶつかりうなり絶えて行った
地を匍えよかのモンゴーレンフレッケよ、日暮よ
すでに山脈の雪の襞々にしみゆき
希望は一瞬つき刺しくる颪（おろし）*とたたかい燃えたのか
祈りはつづく更に更に凍る夜へと

冬

ひねもす空は飴の色
ひねもす雲は薄墨（うすずみ）色であったので
西の宮の森あたり
ひねもすのひと色にあきたのか
たそがれはやっとほんのり

*冬季に山から吹き下ろしてくる風の呼称

紅の薄化粧をやりはじめました
それだからすぐ前の有磯（ありそ）海は
だんだん高鳴って来てこまります

人生理法

ある日仏頂（ぶっちょう）和尚が芭蕉に問うた
「今日のこと作麼生（そもさん）」*
「雨過ぎて青苔湿（うるお）う」
「青苔未だ生ぜざる時の仏法如何」
「蛙飛び込む水の音」と
芭蕉がこたえた
時間なき時間
無心無念
なる程かかる真理の奥に

*禅問答のとき、相手の返事を促すのに用いた用語で、「さあ、どうだ、いかに」の意

一切の人間の静寂たたえられ
真の人間あらわれ
あるいは真如
あるいは不動神妙
まさに人生一如の法来たる
水の流れのごとく
止まることなき
人生の理法正に
かくの如き姿ならん

利　休

真の朝顔を見るために
朝顔畑で
一輪だけのこして他はみんなきりとった利休

清正（きよまさ）に
斬れるすきすら与えなかった利休
「和敬清寂」
小さい梅の木の間より
真実の海の風景をながめた利休
偉大な余白の真理をのこして
悲劇の一生を終っていった利休
茶禅一致
行禅一致
詩禅一致
利休は弱きか強きか
知らず
その光芒（こうぼう）千古にかがやく

春と新任

はああの建物ですか
ロダンの考える人のような銅像があって
まるで十七世紀風な宏壮(こうそう)な大教会のようですな
あの銅像は有名な創立者のH博士です
それにこの病院は
施療患者もあつかうので
教会風にみえるのですね
それでもここの医員たちは元気ですよ
アルバイトだって
動物実験だってよそにまけやしない
それに野球も大変つよいのです
ちょっとピッチャーがいないところで
困っていますが

あなたは野球をやらんですか
はあ野球ですか
この教会風の建物の中でも
野球をやる人がいるのですか
それにあのプレさんの白い帽子のかっこうは
ちょうど絵にかいたナイチンゲールのようにきちんとして
硫石(さすが)に官立病院の正しさですね
それで僕のやろうというのは
血清学の研究ですが
そのために山羊を二頭私費でかわせていただきます
病院の山羊とまちがうといけないとすれば
首に赤いキレでもまいておきましょう
今日この頃のように
春日つづきでは
クランケ*もあまり

*患者のこと

大したものも来ないでしょうね
それでは僕は先ず院長室へうかがいます
他の方々にもあなたからよろしく云って下さい
内科の方へあとでこさせていただきますから

老子出関

――故父半茶が所有小杉放庵画伯の絵に題して

……道沖にして之を用う、
　或は盈たず、
　淵として万物の宗に似たり、
　其の鋭を挫き、
　其の紛を解き、
　其の光に和し其の塵に同ず、
　湛として或は存するに似たり。……

老夫子己を捨てて
道を説くこと
かえって
あたかも万物の宗に似たり
野にひそめば
かえってあらわる
賢五千余言
その真諦は
全てこれ世界
人生にかかわり
為無為を識別す
或いは上善若水
曲則全
希言自然
と喝破す*

*物事の本質を明言すること

かかる静感の中にひそめる
老夫子の胸裡(きょうり)に
ついに天下をうれうるの気来たり
愛牛にまたがって
住みなれた草廬(そうろ)を出でんとす
大成若欠
其用不弊か
今老夫子
白髪春日に光らせながら
若草萌える
故郷の山河を静かに去る
用兵有言
吾不敢為主為客らの句章を思いうかべ
莞爾(かんじ)として青空にみとれながら

詩作ノート

課題

僕を見せるために
どうすればよいか
僕を見せないために
どうすればよいか
いいやそんなところに僕はいない
と云えるまでになるには
どうすればよいか

愛

自己犠牲
それから努力と忍耐

それから

酒

僕は酒を三十五才から用いた
これはふとしたことからである
飲めば愉快になることが出来た
たとえ秋風が額や髪を吹きなでて行っても
酒のめば酒の世界が生れた

抵抗について

僕は抵抗に抵抗をつづけて来た
しかしやがて無抵抗の重さをも知った
それは花につつまれた骨か
骨につつまれた花か
人生をこのようにつかむしか方法がなかったらしい

それが僕の闘争心であった

詩について

大切な心の芯(しん)を
そんなに粗末にあつかっていいんですか

詩について

あぶないあぶない
針金なんぞふりまして

詩について

ついあたたかくなってくるもの
つい強まってくるもの

▽あとがき

この詩集の上梓は、古くよりくわだてられたもので、そのため、相馬御風先生の序文は四年前に、吉田一穂氏の序詩は八年前に、新制作派の内田巌画伯の序詩及び装画は四年前にそれぞれいただいており、著者としても、いろいろな状況のための出版遅延は、非常に心苦しくつねに思っていたが、ここにあらためて、上記の御厚情寄せ下さった方々に対し、おわびと、心より感謝を申しのべます。

×

この詩集には、ごく最近のものもあり、又非常に古く、ごく初期の時代のものも少しまざっている。しかしいずれにしても私には思い出深いものばかりであり、その意味で、私の一つの人生の歴史の集積たることに間違いない。私は詩を愛している。しかし詩を思う心を更にこよなく愛している。その意味で自分は、及ばずながら、出来るだけ詩表現の透明さというものを心かけて来ている。又、これまでの詩篇の多くは「麺麭」「昆侖」「旗」「文学研究」「詩原」「早稲田文学」「三田文学」「日本の風俗」「高志人」「北の人」「文学国土」「北方」「新生」「現代詩」（順不同）等に、又集中の「北アルプス」一篇は昭和二十三年度「現代日本代表作詩集」に発表した。

×

この詩集の印刷は、全くスガキ印刷株式会社社長須垣久作氏の御厚志によるもので、深く感謝いたしたい。又須垣氏は古くより良寛禅師の讃仰者で、真蹟多く所蔵され、その熱烈さは非常なもので、かくれたる良寛禅師研究の篤志家であるが、このことが、即ち、私の詩集の良寛禅師、相馬御風先生へのつながりとなり、このような御厚志を恵ぐまれた契機となった。尚、この間に私の母方の従兄石黒卜風兄の熱意があり、又、出版に対しては畏兄作家妻木新平氏並びに草原書房社長三好貞雄氏の骨肉さながらの御後援に浴し、目出度くここに詩集上梓を完了出来ましたことは私の非常に欣快とするところで深く感謝いたしたい。

×

近来心身すぐれないところが多くあったが、私はつねに詩によって鼓舞されて来た。苦境に処すれば処する程、私は詩を強めて来たように考える。思えば十五才にして母を失った私が、つねに絶望を克服さしてくれたのも詩であったと、その長い年月をいささか今更ながら回想してみた。詩はつねに、柔の中に剛をつつみ、剛の中に柔をつつむと考える。この意味で、詩は人間を落すものではない。詩はやはり、志であり、即ち意志であり、意慾であり、魂の火花である。その意味では私は、生活を叫ぶ側の人間であろう。しかし今後は、出来るだけ私は光の詩を志ざしたい。

×

私は文科の学校の本科一年から医科に転校した学歴を有する者だが、これも文科学生の頃、チエホフやジュール・デュアメル*に心酔したことも多少関係があるかも知れない。

又、私は日本の歴史上の人物では、利休、芭蕉、良寛が好きである。そして今も私は利休、芭蕉、良寛を思慕している。そして又、同時にベートーヴェン、ワーズ・ワース、リルケ、カロッサ、ロマン・ロラン等をも思慕している。

尚、この本上梓にあたり、常日頃私ごときを激励し、愛して下さる、先輩、知友諸氏に対し、心からなる愛と感謝の意を表します。又、この本上梓間近くになって、序文者相馬御風先生の訃報に接し、ついにこの本は先生の御霊前にささぐることとなった。悲嘆これにすぐるものはない。

昭和二十五年五月八日　滑川町北方詩社にて

高島　高識

* Georges Duhamel：フランスの作家・詩人。

同じ著者による既刊詩集

1　萩原朔太郎　北川冬彦　序

詩集「北方の詩」　ボン書店刊

（北方の詩批評抄）

この詩集を読んで私は宮沢賢治氏の詩を読むような楽しさを感じた。嘔吐を催さす様な詩の多い現代にあって既に人を喜ばすこのことだけをもっても、この詩集は立派な存在理由を持っている。（中略）この詩集には題名が示している如く、北方の詩が集められている。その大部分は北方の詩と言うより、北方への詩という方が正しく北方を単に感傷的に唱うのではなく北方へ進軍する意慾の歌である。北へ北へと進んで止まない心情の向う所は、「生れたる新しき原始よ、雪よ」に示されている様に強大な原始の創造力なのである。この北方への希求は外でもなく、ダイモン的な活動を意味し、凡ゆる障害を貫いて生き通そうとする意力の現れに他ならない。ここに表された北方の自然は不気味な程生命に満々たるもので、これが現在の高島氏の心の住む世界であろう。

――昭和十三年「科学ペン」批評――

2　浅野晃　序

詩集「山脈地帯」　相澤光朗装幀　旗社出版部刊

（山脈地帯批評抄）

ながらく病蓐にある詩人が凛然たる意気を以ってつづった高邁なる詩作品をあつめたものである。浅野晃氏はその序文で、「かような人を、私は純粋な詩人と呼ぶ。高島君は純粋な詩人である。日本の新しい詩歌の時代のために戦っている戦士である。君の詩を読んで無感動な輩は恥ずるがよい」といっているが、この山脈地帯の詩人は、アルプスの巨峰と共にある、まれに見る高潔な詩人である。（中略）

――「三田文学」批評――

この詩人には、哀愁がある。だがその哀愁は健康な哀愁を投げ出す感受性の閃きの中に象徴される。そこにこの詩集の特質が見られる。市井的な対象に向う際の作者の愛情――あまりにも人間的な愛情は、自然のやまなみに向う時の冴え切った観念のポーズよりも親しめる（中略）

――「帝大新聞」批評――

「めぐりの雪をうつしているので、雪はいまにも落ちこみそうにしている、ここだけに世界があるというように、それは平明な鏡だ。」こういう詩を見ると、私は著者と同郷の郷倉千靭氏の或る作――たとえば雪の湖を画いた――を憶い出す。

郷倉氏の童話風なまた常識的な手堅い纏め方はないが、陶器などのあの冷やかな感触を持ち、薄蒼い陰影に充ちていてしかも澄明に冴えている。雪にある鉛いろの色に就いて「それは色そのものとして受ける感覚より温度を失っているという冷却感のせいかも知れない」と述べているが、そういった妙に清澄なトーンがそこはかとなく漲っていて、それがまたその凛然たる心情にも作用している。（中略）

――「芸園」宍戸儀一氏批評――

昭和二十五年五月二十五日印刷
昭和二十五年六月一日発行

詩集 北の貌（きたのかお）
定価 百五十円

著者 高島高（たかしまたかし）
富山県中新川郡滑川町堺町八六六
東京都千代田区有楽町一ノ十二

発行者 三好貞雄
東京都千代田区有楽町一ノ十二

印刷者 須垣久作
富山市古鍛冶町五九

印刷所 スガキ印刷工業株式会社
富山市古鍛冶町五九

発行所 草原書房
東京都千代田区有楽町一ノ十二
電話銀座(75)二一五五
振替東京二九五九五番

★草原書房既刊★

東京都千代田区有楽町1の12
振替東京 29595 番

北川冬彦、三宅周太郎、堀内敬三共著
新しい鑑賞讀本 B6 一七〇頁 価一〇〇円

北川冬彦著
長編叙事詩 氾濫（重版） B6 二一〇頁 価一六〇円
附録 長編叙事詩及び「氾濫」批判集

川路柳虹、川路明共編
萩原朔太郎詩鈔（重版） B6 二五〇頁 価一八〇円

妻木新平著
小説集 取り亂した良心 B特製 二〇〇頁 価二五〇円

西條八十著
随想集 わが詩わが夢 B版特製 二〇〇頁 価一八〇円

笹澤美明著
評釈と鑑賞 現代詩の味ひ方 B6 三四〇頁 価二五〇円

木俣修第四歌集
凍天遠慕 B6特製 一二〇頁 予価一五〇円

高島高著
詩集 北の貌 A5特製 一二〇頁 価一五〇円

現代文芸講座
第三巻 俳句篇 A5 一六〇頁 予価一五〇円

村野四郎著
詩集 豫感 B版特製 一〇〇頁 価一〇〇円

（送料不要）

◎本書は原詩集の字組・字体に可能な限り近づけてあるが、一部の旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。また、難読の語句には振り仮名、難意の語句や著者特有の表現には＊印を付し、小文字で注釈を下部に入れた。いずれも、少しでも読者の便を図ろうとしたもので、原詩集の雰囲気をいくらか損じることについてはご寛恕いただきたい。

詩が光を生むのだ　高島高　詩集全集

第三巻「北の貌」

二〇一三年一〇月一五日

一～四巻＋別冊（分売不可）

定価　四〇〇〇円＋税（セット価）

著者　高島　高

発行　高嶋修太郎

〒九三六－〇〇六八　滑川市加島町八六六

発売　桂書房

〒九三〇－〇一〇三　富山市北代三六八三－一一

電話　〇七六－四三四－四六〇〇

ＦＡＸ　〇七六－四三四－四六一七

印刷　株式会社　すがの印刷

ISBN978-4-905345-51-0